

## グループソーシャルワーク ～S-GIRLS 活動報告～

秦野精華園 生活3課  
小林 佳子 安藤 裕子 齋木 よしみ

### 1.S-GIRLS について

S-GIRLS は、秦野精華園利用者自主活動のダンスチームである。平成 28 年度研究活動援助事業を活用し、「できる自分を誇らしく」と銘打ち、細々とやっていた利用者余暇活動支援が、彼女たちの大きな自信に繋がるようにとの支援の願いを込め取り組んだ。

2016 年、平成 28 年 S-GIRLS 発足時、秦野精華園生活3課は、19歳から54歳の女性26人が暮らす女性課だった。当時その中の有志10名余りが練習を重ね、園内行事等でダンス発表をしていた。

生活において、特に精神面での支援を多く必要とする彼女たちだが、ダンスは大好きである。しかし当初は、障害や生活歴など、様々な理由から自己評価が低く、自信を持ってダンス発表しておらず、もじもじ顔も下向いて自信なさげだった。

運よくその年から発表の機会を得ることができ、法人各園のイベントのほか、活動に賛同する職員の見送りでのイベント出演や人権フォーラムなど、周りの協力あって出演をすることができ、発表機会をもらう中で自己満足でなく、相手を喜ばせることに目を向けられるようになったことが自己有用感につながり、自信を持てるようになったと考えられる。研究活動費の活用により、S-GIRLS 所有のCD、ラジカセがあることで練習したい(踊りたい)ときに踊れるようになり、その中で小さなけんかや仲直りを繰り返し、ダンス活動に関しては、参加を自由に認める(やりたい人だけやる)主体的な意思に基づく活動へと移行し、今やダンス活動といえは S-GIRLS と指名頂き活動している。

### 2.今回の研究活動へ

活動を続けていく中で、集団としてリーダーの代替わりなども経て、自然に役割ができていくのを見て、グループワークと意識してできないか、私たち支援者もただ楽しい、よかったではなく、援助者として原点にかえり、援助技術を使っての活動支援を体験することを目的とした。前回は、利用者に対する支援を柱に研究活動を行ったが、今回は、支援者、職員の意識を柱として支援者がグループワーカーとして役割を意識して活動を行うことを目的とした。

ソーシャルグループワークとは、社会福祉援助技術の方法のひとつで、利用者と直接接しながら援助を行う直接援助技術の中の集団援助技術。

これまでの活動から3年目の平成30年、メンバーのうち3人が地域移行をし、リーダーにAさんが抜擢された。自分たちで選んだリーダーなので大きな課題なくグループは活動を継続していた。

しかし平成31年、2019年4月、変化が起こる。高等部を卒業したばかりの3人の入会希望があったことが集団を変化させると考え、集団のなかで各個人が成長や発達を遂げられるよう、グループソーシャルワーク、援助技術を意識した活動支援をしようと考えた。

グループワークは、興味や年齢を同じくする個人が小集団を作り、プログラム等を通じて、各個人が成長、発達することを目的とするのだが、S-GIRLS を小グループと位置づけ展開した。  
①メンバー個人の自由意志により構成されるもの(加入、脱会は自由)

S-GIRLS は、自由なサークル活動で、利用者自身が決めたルールにも参加、不参加は自由。  
②メンバーは年齢、性別、興味などの点で共通点(等質性)がなければならない

## 令和元年度 研究活動援助事業①

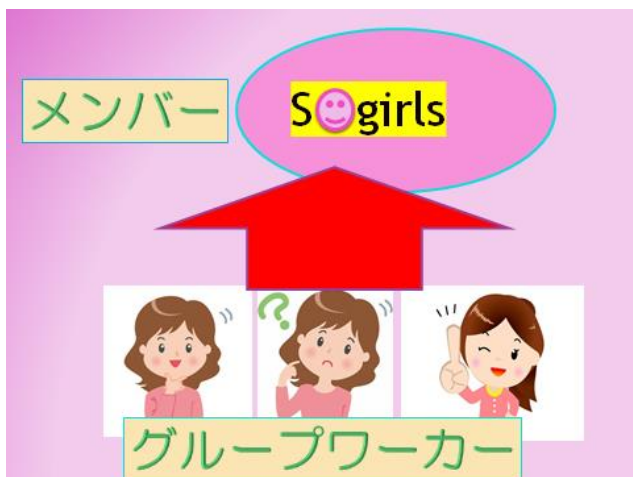
S-GIRLS の年齢幅は 10 歳程度、共通する興味関心はダンス。

③側面的な援助者としてのグループワーカーがいる地域社会、施設で行う。秦野精華園生活 3 課を基本の活動場所とする。

④グループのメンバーは、集団としてまとまりやすい 10 人前後

最大 13 名くらい 最小 8 名。ちょうど条件に当てはまる。

メンバーは利用者、グループワーカーは私たち職員。(以下 メンバー、グループワーカーと表記)あくまで職員は縁の下の力持ちであり、助けが必要な時に手伝う。このことによって、自分たちで活動を継続できること、たとえ職員が異動になっても自分たちのやりたいことは自分たちで運営できるグループになればそんな目論見もあった。



幸運にも 2019 年関東地区知的障害福祉関係職員研究大会、関ブロの懇親会でのステージが準備されたことから、このステージに向かい支援を展開することとした。

### グループワーク展開 (準備から開始まで) ①

(参考：中央法規一般社団法人日本社会福祉士養成校協会 社会福祉士相談援助演習)

準備期	<ul style="list-style-type: none"> <li>①メンバーのニーズに気づく</li> <li>②グループの趣旨、活動内容を計画し参加者を募る</li> <li>③利用者の生活課題、ニーズ、目標、関心、心配事について理解する</li> <li>④起こりそうなできごとを予測する。</li> </ul>
開始期	<ul style="list-style-type: none"> <li>①メンバー同志が互いに受容できる雰囲気を作る</li> <li>②受容、傾聴、共感によってメンバーの不安をやわらげ信頼関係をつくる</li> <li>③メンバー間の仲間意識と信頼関係を築く</li> <li>④具体的な活動やルールについて話し合う</li> <li>⑤メンバーの目標、目的、<b>援助者の目標、目的を意識する</b></li> </ul>

### グループワーク展開 (作業から終結まで) ②

(参考：中央法規一般社団法人日本社会福祉士養成校協会 社会福祉士相談援助演習)

作業期	<ul style="list-style-type: none"> <li>①メンバーが自主的に役割をもって協力しながら自分たちの課題に取り組めるように支援する</li> <li>②<b>メンバー間のトラブル、否定感情への理解と受容</b></li> <li>③集団に入っていけないメンバーが自由に自己表現できるように支援する</li> <li>④メンバー間の相互協力を高めメンバー主導のグループへ移行する</li> </ul>
終結期	<ul style="list-style-type: none"> <li>①終結にともなうメンバー間の感情を分かち合う</li> <li>②グループワークを振り返る</li> </ul>

## 3.グループワークの展開の実際

### 準備期

グループの共通事項として、関ブロの懇親会ステージに立つことを目標に「みなとみらいでのダンス発表の前に遊ぼう」を合言葉に活動することとした。

グループワーカーは、新しい 3 人のメンバーの対人関係における課題と他メンバーとの関係性に着眼し観察していくこととした。

また、そのことから起きうる出来事の仮説、(多くは対人トラブルだが)を立て生活場面や作業場面での不利益とならないよう配慮することとした。

多くのいさかいの原因は、障害特性でもあるが「勝手な思い込み」や「伝え方」の行き違いにあるようだということも予測した。思い込みをしない方法や伝え方の行き違いの経験をしたうえで自己解決方法を体感してもらうことをこの活動の目標と

し、グループワーカーが過保護な代弁者とならず、メンバー間での自己解決を支え見守ることがグループワーカーとして職員もできたらいいと考えた。

#### 開始期

開始期においては、初めから続くルールの再確認を行った。

### S-girls活動開始説明

利用者さんがダンス発表を職員はその発表をお手伝いすることを勉強するのに法人から研究活動費をもらいました。

### S-girls参加ルール

- 1 出入り自由
- 2 けんかしない

新しいメンバーがいるので、これまでの活動の振り返りを皆で行うことで楽しかった記憶など想起させている。

また、リーダーのAさんはじめ、勝手に他者の気持ちを想像し「思い込み」気を使いすぎてしまうなどの課題があることや障害特性ゆえ想定されるトラブルとして、練習時間や場所の伝達を平等に行うことが出来ず、結果対人トラブルに発展することなどの課題ふまえ、新人の3名以外のメンバーには新人さんには優しく、皆に平等に情報を伝えること。と伝えている。

また、グループワーカーである職員は、上手に踊るのはメンバーの目標であって、グループワーカーの目標はあくまで支えること。

#### 作業期

発表が近づくと皆イライラし、練習を休むメンバーに「なんでいかないの」なんて言うってしまうことも過去には見られていたが、28年度から継続しているメンバーは、先にリーダーに「遅れていく」や「今日は休む」など言うておくなど、ちょっとした気遣いが見られるようになった。また普段の生活では自分の思い通りにならないとすぐ拗ねてしまうことが多いメンバーも、メンバーだけで活動する体育館での自主練習では、一度もトラブルなく過ご

していた。積み重ねた経験からちゃんと集団の中でどのようにふるまうか考えることができることがわかった。

リーダーは頑張り、好き勝手なことをされても、わがままにふるまわれても辛抱強く、優しくふるまい続けた結果、新しいメンバーは、簡単に言うと勝手なふるまいが目立ち、トラブルが頻発するようになった。面倒見良く人望もあるが、自信がなく他者に合わせてしまうのがリーダーAさんの課題。特に困ったことになると相談せず、勝手に自分が悪い、皆に嫌われているからと思い込み、自分で自分を追い込んでしまうAさんが、リーダーとしてどのような方法で解決していくのか直接的な方法でなく支援するスタンスを維持することを意識し、グループワーカーが介入せず時期を見て介入する、見守りながらの支援がなかなか職員であるグループワーカーにはできない。つい介入や代弁、ときに上手に踊れるよう叱咤激励するなど目標を見誤ることもしばしばあった。

#### (エピソード1)

「みんな勝手なことをする」「もうやめたい」リーダーAさんからの相談。

新しいメンバーのうち、Aさんからすれば勝手なふるまいが目立つ新人Bさんに対しての思いがいつの間にか「みんな」になっていた。「みんななの？」と問題を整理していく。

違うとAさん。「Bさん」と答える。

ワーカー:「みんなはAさんがリーダーでよかったって言ってるよ。」

Aさん:「やっぱり無理」「だって優しくしてるのにわかってくれないもん」「注意すると雰囲気が悪くなっちゃう」「頭に來ちゃう、リーダーだから我慢してるもん」

ワーカー:「頭にくるねえ」

共感したがAさんからすれば、なんで職員は介入してくれないのか歯がゆい思いがあったと考えられる。地域移行したらいろんな人がいる、職員はいつも一緒に入れないと理由も伝え、私はそんなときは仲間に相談していると話し、もし注意するならちゃんとダメなことはだめだと怒らず伝えることと念押しした。

## 令和元年度 研究活動援助事業①

### (エピソード 2)

数日後、メンバーの一人に「今お時間いいですか、体育館に来てください。もうちょっと難しいと思う」と言われ駆けつける。SOSが出せたことは大きな成長と感じる。

メンバーが手際よく状況を説明する。いいわけではなく事実を上手に伝えている。

リーダーのAさんがダンス練習で怒ったわけではなくBさんに指示出しをした際に、ひとりが感情的になり、「みんなが自分のことばかり責める！」と言っているとのこと。

他のメンバーは、感情的になっているBさんに対して「だって言うこと全然聞かないじゃん！うちら仲良くやりたいのに困るよ」という。Aさんはとても困った顔をするばかりだった。

落ち着いているAさんから事情を聴く。

Aさん：「ダンスの練習中、立ち位置について説明をしたが無視をして行動した」

Bさん：「Aさんはちゃんと教えてくれた。他の人がAさんが言った後にいろんなこと言うからわかんなくなっちゃった！！無視したんじゃないくてわかんない！！」と叫ぶ。

Cさん：「私もそう。誰かが話しているときにまわりで言われると分からなくなっちゃうからわかる」

その言葉にほかのメンバーもわかる、わかると共感を示した。

Cさんが、誰かが話しているときにほかの誰かが話すのやめようと提案。これですべてが解決したわけではないが皆、聞き取ることや言語の理解に課題を抱えているため共感できる出来事だったようである。

上記のようなエピソードを繰り返しながら、しかし発表まで(エピソード2)のような職員が立ち会うようなことはなく当日を迎えることができた。



写真は関プロ

### 終結期

発表後、振り返りを行った。

まずは、表向き目標である『楽しく発表する』について、当時の園長や部長に依頼し、利用者は点数表現をするとわかりやすいに基づき「100点満点だった」と伝えてもらった。

グループワーカーである職員からは、具体的な出来事をあげて説明しながら「自分で決めて行動する」「自分の考えをみんなの前で発表する」「リーダーとしてグループをひっぱる」「グループがまとまるように協力する」「相手と自分の意見の違いを考えながら人の話を聞く」「人の意見を聞いて自分の考えに取り入れる」などの体験ができた、偉かった、素晴らしかったと、彼女たちの成育歴もかんがみひとりひとりへ良い評価として伝えている。

グループワーカーである職員同士も同じく出来事を共有しながら見守ることでの本人たちのエンパワメントを引き出せたこと、成長を感じたことを確認し合った。

#### 4.研究活動を行って

この後、Aさんは自らリーダーを辞める。やめたいといわれた時、正直、残念だという気持ちがグループワーカーにはあったが、ルール(出入り自由)に沿って快く了解した。これまでのAさんからしたら、辞めたら他のメンバーを避け「自分はもう仲間じゃない」と言わんばかりに極端にふんつとした態度をとるのではないかと考えていたが、その後、生活も作業も変わらず過ごしていることに成長を感じた。

再結成時のリーダー依頼も快く引き受けるなどもしている。

一方で難しいと感じたのは、グループワーカーの意識である。「ステージで発表する、上手に踊る」のはメンバー、利用者の目標であって、職員、グループワーカーの目標ではないことを意識すること。

例えば一人のメンバーが活動中に拗ねてしまったなどグループ内でトラブルがあったときこそが自己解決の方法を学ぶ機会であるにもかかわらず、つつい職員が介入し「仲良くやろうよ」と促してしまう、誘導してしまうことがみられることがしばしばあった。

日常的な支援のなかでもこのことはしばしば見られる。ともすれば職員は過保護に支援を提供しているのでは、そのことが個々人のエンパワメントを引き出せずにいるのではないかと考えさせられた。

またグループソーシャルワークにおいて知的障害者を対象とした場合、自ら目標や課題を意識することは困難な場合もあると感じたこと、そして目標なき活動、好まない活動では効果は得られないと考える。

今回は、好きなダンス活動であり、幸運にも関ブロ懇親会ステージという非日常的な目標ゆえにある一定の体験が得られたと考える。

前回の研究活動においても記載したが、権利条約にもある余暇活動の権利擁護については不足感は否めず、今後も工夫が必要と考えている。